

須恵器生産のはじまり

The Beginning of the Sue Ware Production

酒井清治

はじめに

- ①倭における須恵器生産開始期の窯跡
- ②須恵器の系譜
- ③器形と技法の特色から見た須恵器の「日本化」について
- ④倭における平底坏の系譜とその問題点
- ⑤須恵器生産開始の目的
- ⑥須恵器の年代
- ⑦倭国と朝鮮半島三国

おわりに

[論文要旨]

倭に須恵器が伝わったのはいつで、どこからか、またその須恵器はなぜ導入されたのか、土器生産を通して倭と朝鮮半島の交流を探ることを目的とした。

構造窯を使った土器生産が伝わったのを、時期あるいは地域を考慮して段階設定して1段階、2a段階、2b段階とした。1段階は百済地域から瓦質土器生産技術が、2a段階はおもに加耶地域から陶質土器生産技術が、2b段階はおもに百済・榮山江流域地域から陶質土器生産技術が伝わったと考えた。1段階の出合窯跡の土器は瓦質でそれも日常什器で渡来人のために生産した窯と考え、のちの陶質土器生産と目的が違っていると想定した。2a段階の大庭寺窯跡には平底坏が出土し、その系譜が問題であった。これについては百済・榮山江流域に分布する平底坏の系譜を引くと考え、甕も含め、2a段階の加耶系の中にもわずかながらすでに百済系・榮山江流域系が含まれるとした。それは加耶系にない坏と甕を選択して取り入れたからとした。

倭の須恵器生産導入の目的は、2a段階の窯の器種構成を見ると大甕が主体でその後も長く作られていくが、器台はすぐに激減し、甕、続いて坏が順次増加していく。同時期の古墳の器種構成を見ると大甕が見られない。大甕の生産目的は大型倉庫と関連する貯蔵器種として製作されたとした。器台は供献具であるがすぐに激減する。それに対して甕が取り入れられ早く定型化し、祭祀具等に使用されていった。しかし坏は供膳具としての性格が強く、その点で採用が遅れ定型化も遅れたと考え導入器種選択があったとした。

須恵器の生産開始年代について陶質土器との並行関係や年代の分かる資料、埼玉古墳群等の検討から持ノ木古墳の時期で5世紀初頭とした。その理由として朝鮮半島の高句麗南進に対抗して倭が百済・加耶と同盟関係にあったこととした。

はじめに

倭では古墳時代中期に大陸の高度な文化や文物、技術が導入された。その一つが須恵器生産である。須恵器は中国の灰陶の系譜を引き、朝鮮半島から伝えられたがその特質は轆轤成形と構造窯による高火度での還元炎焼成にある。須恵器はどこから、どのように、なぜ伝えられ、倭にどのように受け入れられたのか、出現期の須恵器生産の諸問題について検討してみたい。

朝鮮半島三国時代の土器は、倭の須恵器にあたる還元炎焼成の陶質土器、土師器にあたる酸化炎焼成の軟質土器、陶質土器よりもやや焼成が甘く灰色あるいは灰白色の瓦質土器がある。この瓦質土器はほとんど列島にない。このうち登窯のような天井を持つ構造窯は、陶質土器と瓦質土器を焼成した窯である。

須恵器は陶質土器の系譜を引くが、倭にはそれ以前に瓦質土器の窯が見られることから、それを1段階とする。

かつて田辺昭三氏は「……日本で須恵器生産が開始されたときから、地方窯が成立するまでの最初の数十年間、須恵器は陶邑とその周辺から、一元的に供給されていったということができよう。そこで、この限られた時期の須恵器を一括して、初期須恵器とよぶことにする。」[田辺1971]とした。このように須恵器は大阪府陶邑窯跡群とその周辺から一元的に供給され、生産技術も陶邑窯跡群から全国各地に伝播したという生産一元論であったが、以下に述べるように近年、初現期須恵器は西日本を中心に、各地で操業が開始されていることが確認されたことにより、多元的に生産開始していることが判明した。すなわち畿内政権が最初に須恵器生産を導入し、それが倭系となり、各地に波及していくという図式は疑問である。

倭に最初に伝わった加耶系陶質土器の系譜を引き、各地で生産開始された多元的生産段階を2a段階とし、初現期須恵器⁽¹⁾と呼ぶ。後続する陶邑窯跡群で一元的生産段階のいわゆる「日本化した須恵器」と呼ばれる初期須恵器、筆者は「栄山江流域系」とするが、これを2b段階とする。

①……………倭における須恵器生産開始期の窯跡

1 1段階の窯跡

神戸市出合窯跡の土器[亀田1989]は、叩きを持つものの焼成から瓦質土器といえ、形態も忠清南道安市清堂洞遺跡、忠清北道鎮川郡三龍里窯跡の4世紀後半の瓦質土器に類似している(図1)。窯構造も焚口から燃焼部にかけて急激に下がり、平らな燃焼部を経たのち焼成部にかけて緩やかな傾斜を持ってあがっていき、窯の長さ比べ広い舌状の平面形態となり、忠清北道鎮川郡山水里87-8号窯跡と共通している。すなわち出合窯跡の土器群は特色から須恵器とはいえず、須恵器が伝わる以前の瓦質土器、あるいは朝鮮半島系瓦質土器といえる。現段階ではこの窯は、倭に構造窯として導入されたものの倭に根付かず、須恵器の直接の母体とならなかったと推測する。それは朝鮮半島においても瓦質土器が発展して直接陶質土器にならないことから倭でも同様と考える⁽²⁾。たとえ後続する瓦質土器系の窯が発見されたとしても地域的な変遷で終わる可能性がある。須恵器生

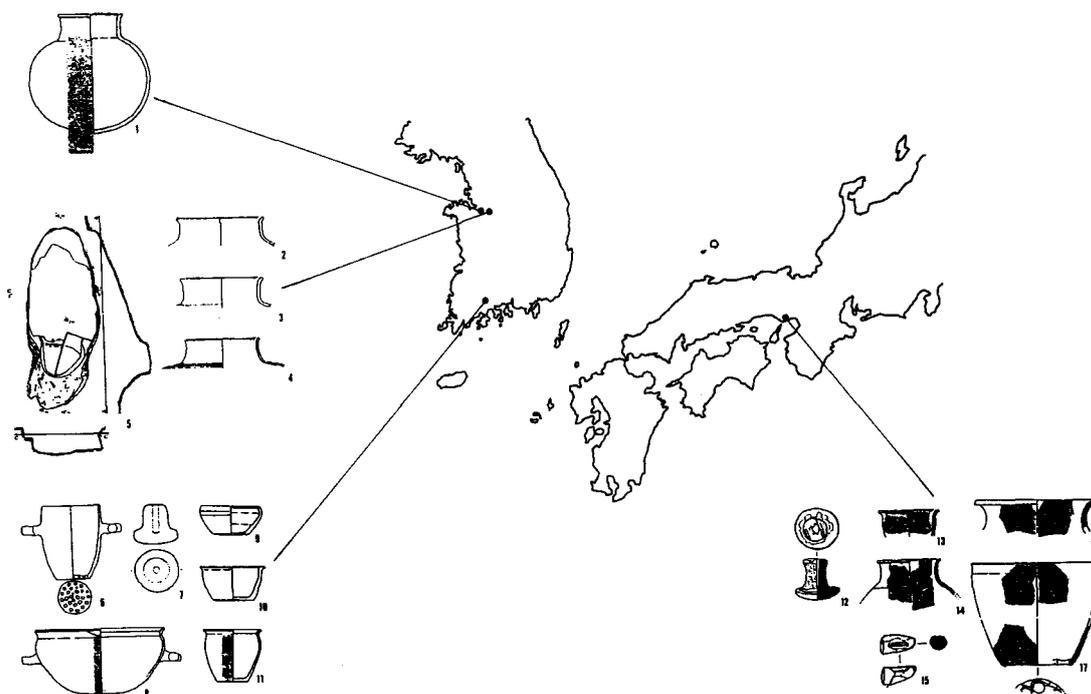


図1 土器生産開始第1段階の関連遺物

産として段階設定するならば0段階とすべきであろうが、今後この窯の系譜が発見される可能性もあり、その後の土器生産にどのような影響を与えたか不明確であること、構造窯という新しい窯業技術が伝播したということからも段階設定して1段階とする。時期は出合窯跡の出土土器が忠清道の4世紀後半代の瓦質土器と類似することから、その年代を考えたい。

2 2a 段階の窯跡

この段階、倭に始めて須恵器が伝えられた。一般に初期須恵器といわれるが、2a 段階の須恵器を初現期須恵器とする(図2)。初現期須恵器の生産は、西日本各地で開始され、その分布は福岡県から大阪府まであたかも朝鮮半島から畿内への瀬戸内ルートに沿っているようである。北部九州では福岡県夜須町・三輪町の小隈・山隈・八並窯跡などの朝倉窯跡群、筑紫野市隈・西小田窯跡群、豊津町居屋敷窯跡がある。瀬戸内地域では岡山県総社市奥ヶ谷窯跡、香川県高松市三郎池西岸窯跡、豊中町宮山窯跡がある。近畿地域では大阪府陶邑窯跡群には堺市大庭寺遺跡の梅(TG) 231・232号窯[岡戸ほか1995]・大野池(ON) 231号窯、和泉市上代窯跡・濁り池窯跡、河南町一須賀窯跡群、吹田市吹田32号窯などがある。

また、窯が発見されていないが、製品の特徴から初現期須恵器生産が推定されるものとして、倉敷市菅生小学校裏山遺跡、和歌山県和歌山市楠見遺跡、滋賀県の琵琶湖東岸地域、三重県津市六大A遺跡、愛知県名古屋市中区正木町・伊勢小学校遺跡など名古屋台地西縁地域などがある。さらに兵庫県内にも初現期須恵器が多いことから可能性がある。

岸和田市持ノ木古墳[三辻・虎間1994]の土器群は、報告書等で57点が図示されているが、その

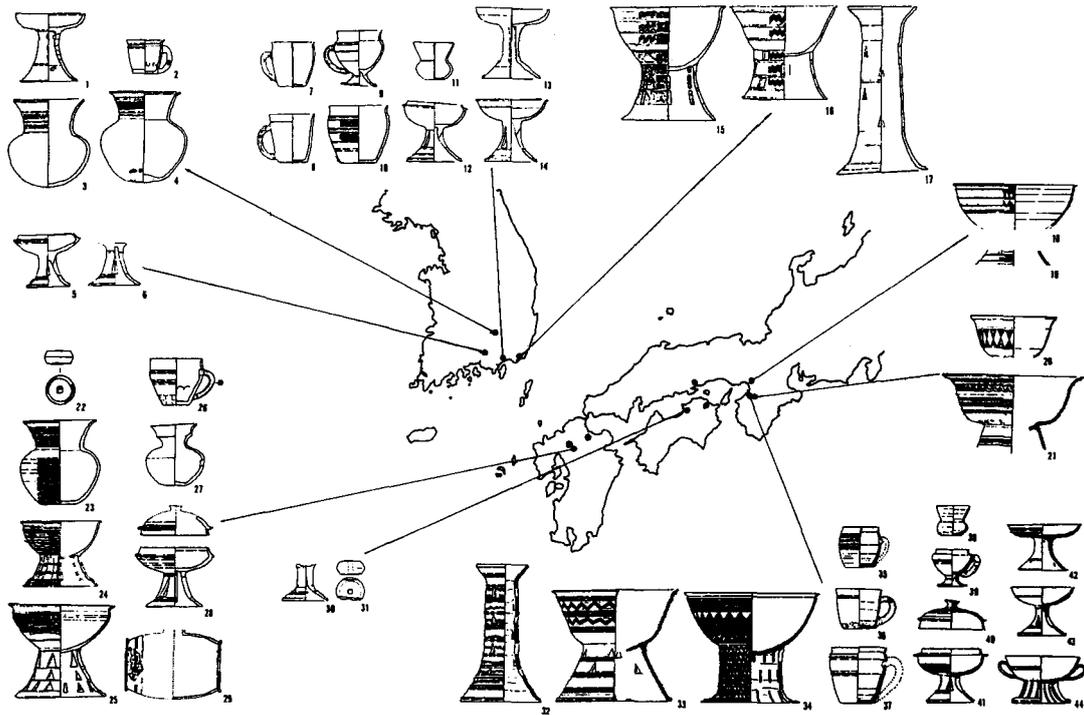


図2 土器生産開始第2a段階の関連遺物

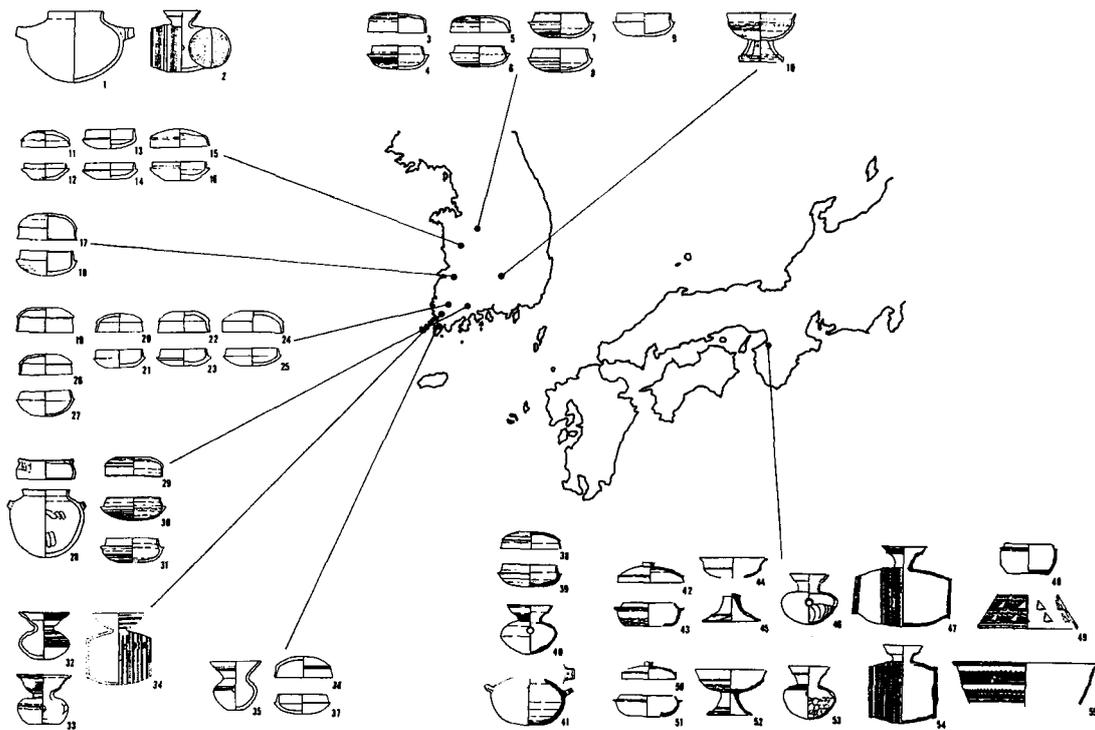


図3 土器生産開始第2b段階の関連遺物

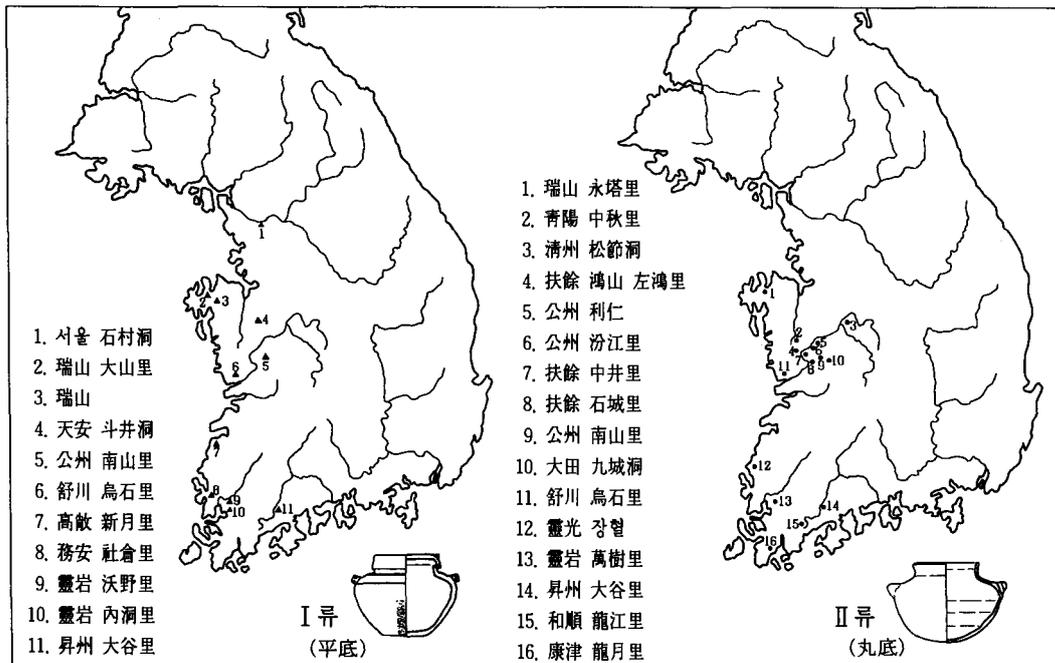


図4 両耳付壺分布図 [金鍾萬 1999]

器種構成は蓋坏1，有蓋高坏2，無蓋高坏2，壺9，有蓋長頸壺1，把手付短頸壺1，短頸壺1，有脚把手付短頸壺2，有脚壺1，小型壺1，鉢形器台5，筒形器台6，小型器台1，鉢1，甕1の35点である。三辻利一氏は胎土分析により2ヶ所の生産地を推定した(図6)。一群は陶邑産の可能性を指摘したが，もし陶邑産とするとこの一群は形態から大庭寺TG 231・232号窯よりも古い様相を持つことから，現在確認されている最古の須恵器窯跡よりも遡る窯の存在が推定される。三辻氏の分析のもう一方の一群は，胎土に黄白色粒を含む例で，色調が灰黄色で緑色の自然釉が掛かる。この土器群の類例は韓国金海・釜山周辺に見られ，釜山・福泉洞31号墳，金海・大成洞2号墳，11号墳に類似する。

初現期の窯跡の分布は朝鮮半島から畿内への瀬戸内海ルートに近接する。また，製品から生産地の可能性が推定される和歌山，愛知は，紀氏，尾張氏など地域首長層との関わりが想定され，各地在地首長層それぞれが，渡来工人を受け入れ技術導入し操業を開始した多元的開始段階と考えられる。しかし，この段階の生産は，多くが短期間に操業を停止することが特徴である。陶邑窯跡群と朝倉窯跡群がその後も操業を続けるものの，朝倉窯跡群は5世紀代に操業を停止する。

この初現期須恵器の西日本を中心とした各地で須恵器生産を開始した段階を2a段階とする。

3 2b 段階の窯跡

この段階は田辺昭三氏がいう定型化=日本化が始まる時期で，陶邑窯跡群を中心とする生産体制が整う段階であり，これ以降の各地方の須恵器生産開始期の窯跡は，陶邑の系譜を引いている。陶邑窯跡群ではTK 73号窯からTK 216号窯の頃である(図3)。

田辺氏は「定型化以前の須恵器はTK 73型式→TK 216型式の順に変遷し，次のTK 208型式に

至って定型化=日本化が完成する。」とした〔田辺1982〕。そしてTK 216型式は定型化する過渡期とした。この定型化のはじまる「日本化」について、はたして「日本化」といえるのか疑問があり、検討してみる。

②……………須恵器の系譜

ここでは、須恵器生産開始期の窯跡が、どこから伝えられたのか、朝鮮半島の陶質土器との比較から、系譜を探ってみたい。また、伝えられた須恵器が2b段階に「日本化」が始まるとされるが、その要因についても検討してみる。

1 2a段階の初現期須恵器の系譜

朝倉窯跡群は古寺・池の上墳墓群の須恵器も含めて見てみると、大甕底部を絞り目技法で塞ぐこと、器台の文様は波状文が主体であり、施文方法はコンパス文と同じようである。また、この波状文を持つ壺は平底化しており、甕・樽形甕を焼成することから、慶尚南道西部から全羅南道を一部含んだ地域との関連が想定でき、主体的には加耶系といえよう。朝倉窯跡群は、数十年の操業期間が想定できるが、陶邑窯跡群が2b段階に至り坏の生産を指向するのに対して、ほとんど坏を製作しないことが特徴である。

居屋敷窯跡は、叩きがやや鳥足文に類似しており、全羅道との関連で馬韓系としておこう。

奥ヶ谷窯跡は、大庭寺TG 232号窯にも1点しか出土していない大甕肩部の乳頭状突起が見られ、加耶系の可能性があるものの、詳細な系譜は不明確である。

三郎池西岸窯跡は、甕の底部を絞り目技法で塞ぐこと、口縁に施された集線文から慶尚南道東部の加耶東部系譜であろう。

吹田32号窯は、器台の鋸歯文、格子文、櫛歯列点文の組み合わせが大庭寺TG 231・232号窯とも類似し、釜山・金海地域の加耶東部系譜に求められよう。

一須賀2号窯跡は、甕と器台のコンパス文、器台の櫛描き鋸歯文、擬組紐文から慶州・釜山を中心とした加耶東部系譜に求められよう。

大庭寺TG 232号窯の系譜は、大甕底部の絞り目、器台の鋸歯文・格子文・組紐文・集線文や透し、高坏蓋の櫛歯文、高坏菱形透し・多窓透し・長脚二段交互透しなどから、馬山・昌原・金海・釜山にかけての沿岸地域の加耶系譜と想定する(図2)。

また製品から見た名古屋市、倉敷市の例は、新羅系の様相も色濃く見られるが、岸和田市持ノ木古墳例は、大庭寺TG 231・232号窯の高坏蓋と類似し、共伴する搬入土器が釜山・金海地域の土器群であることから、加耶東部地域の系譜を引くと考えられる。大庭寺TG 231・232号窯出土品が加耶沿岸の広い地域の系譜であるものの、製品そのものを直接朝鮮半島のものとは比較できないのに対して、持ノ木古墳の製品は、製品および共伴する陶質土器が朝鮮半島の資料と酷似しており、持ノ木古墳の段階で倭に須恵器技術が伝播したといえる。

2a段階の初現期須恵器は、列島産と推定される製品も含めるならば、持ノ木古墳・大庭寺TG 231・232号窯から、加耶東部を主体とした地域の系譜を引いており、その系譜を引く初現期須恵

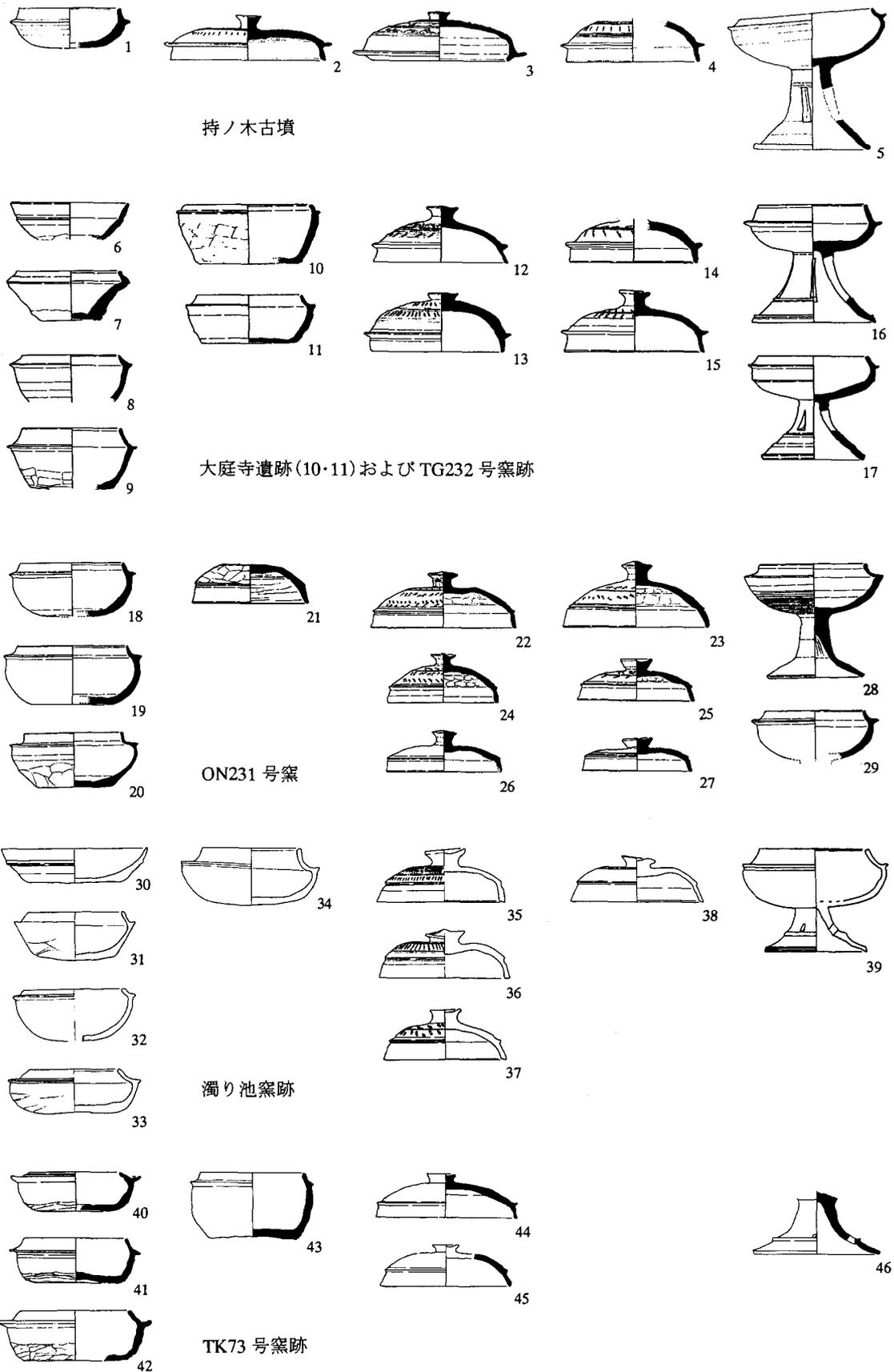


図5 須恵器変遷図

器は畿内・瀬戸内地域に広がる。それに対して、北部九州の地域は加耶でも西部を主体とした地域の系譜を引いており、それぞれの系譜を引く地域が当時の倭国内の首長層が交流していた地域であり、そこから技術導入したことが推測される。しかしながら持ノ木古墳に坏が1点、大庭寺窯跡に坏が4点、甗が少量、朝倉窯跡群に甗、樽形甗が生産されていることから、この時期加耶系が主体でありながら栄山江流域あるいは錦江流域の影響もわずかに見られるようである。

2 2b 段階の初期須恵器の変遷と系譜

倭の中でも持ノ木古墳、大庭寺TG 231・232号窯は、のちの陶邑窯跡群内で操業開始されたが、この地域ではその後操業が継続し多くの窯が築かれた。大庭寺TG 231・232号窯に続いて、大野池(ON) 231号窯・濁り池窯跡→高蔵(TK) 73号窯→TK 85号窯のように、陶邑窯跡群の中で変遷を追うことができるように見える。しかし、その変遷の中で後述するように大きな違いを指摘できる。

まず、出土須恵器の変遷を見ていこう(図5)。大庭寺窯跡TG 232号窯には蓋坏や甗がほとんどなく、樽形甗はないことと、わずかに出土する坏は平底であることが大きな特色である(図9)。高坏の蓋には櫛歯列点文が施され、大甗は底部を絞り技法で作る。続くON 231号窯でも蓋坏は少ないものの、甗や樽形甗が多くなり、高坏蓋に櫛歯列点文を施さない例が見られ、大甗底部に絞り技法が確認できないなど相対的に新しい傾向が見られる。しかし、時期の近い濁り池窯跡では、甗、樽形甗とともに蓋坏も多く出土する新しい傾向が見られるものの、高坏蓋のすべてに櫛歯列点文が施され、大甗底部は絞り技法で作られる古い様相も見られる。このようにON 231号窯と濁り池窯跡から見ると、初現期には窯ごとに器形や技法の変遷速度が違っていたことや、渡来工人の系譜の違いも考慮する必要があるだろう。これが須恵器成立期の様相といえる。

TK 73号窯には蓋坏、甗、樽形甗が多く出土し、高坏蓋には櫛歯列点文がなく、大甗底部にも絞り技法がない。この様相は同一窯跡群内での変遷と見るべきか、系譜の違いと見るべきか、問題である。TK 73号窯の大甗の中に、叩き文様が平行する目に1本だけ直交する目が見られる例があり(図8)、これは百済土器や栄山江流域の土器に見られる叩き文様と同様であることから、前述した蓋坏、甗、樽形甗の増加とともに、TK 73号窯には栄山江・錦江流域の影響が見られると考えたい。

続くTK 216号窯は、注目されることとして両耳付壺が伴うことである。この両耳付壺は、栄山江・錦江流域に分布(図4)するが、須恵器の一般的な器形であるつまみのない蓋坏もこの地域に多い。特に栄山江流域に分布する蓋坏は、回転ヘラ削り調整を行い、その後は無調整であり、倭と共通する技法である。しかし、加耶の蓋坏は回転ヘラ削り調整を行った後、丁寧にナデを施すため、削り目は不明瞭になる。この例として大阪府岸和田市持ノ木古墳の坏が上げられる。

すなわち須恵器は順次、大甗の底部絞り技法や高坏蓋の櫛歯列点文が消滅し、坏・甗・樽形甗が増加し、TK 73号窯に百済土器・栄山江流域の土器に見られる叩きがあり、TK 216号窯に至り両耳付壺が出現し、つまみを持たない蓋坏が主体となる。両耳付壺やつまみを持たない蓋坏について、栄山江・錦江流域との関わりが想定できる[金鍾萬 1999]なら、甗・樽形甗もこの地域に多く見られ、関連があろう。しかし、さらに地域を絞るならば、後述するように倭の須恵器坏蓋は三足土器がないこと、回転ヘラ削りしていること、蓋受け部が上方を向き蓋を受けやすくなることなどから

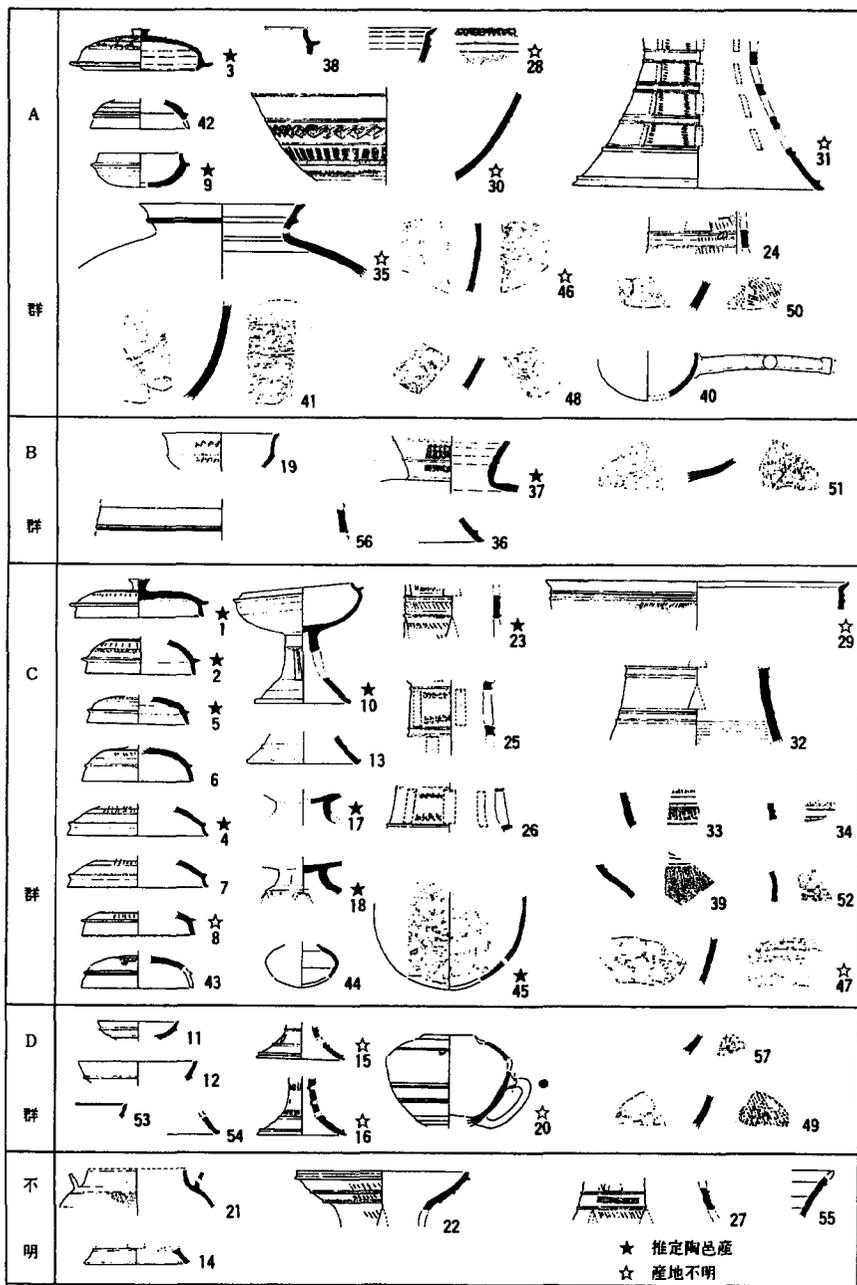


图6 持ノ木古墳各群出土遺物構成図 [三辻利一・虎間英喜 1994]

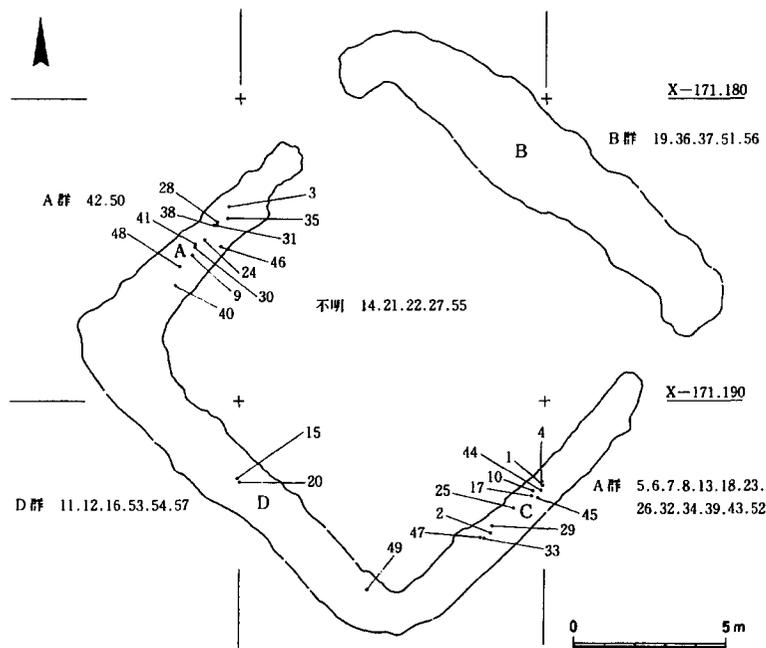


图7 持ノ木古墳各群遺物出土状況図

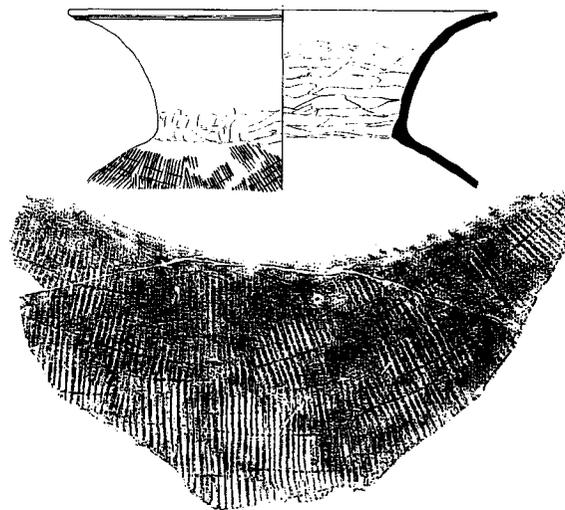


图8 陶器TK 73号窯出土甕と叩き

柴山江流域系といえよう。これらのことから倭の須恵器の大きな流れとして、初現期の加耶系（2a段階）から柴山江流域系（2b段階）の系譜に順次変遷したと考えたい。これが「定型化須恵器の成立段階」といえよう（図3）。

③……………器形と技法の特色から見た須恵器の「日本化」について

倭の須恵器は2a段階に導入された須恵器が、倭の中で「日本化」と考えられてきた。田辺氏はTK 216型式が日本化し定型化していく過程の過渡的型式で、TK 208型式が須恵器固有の性格と特徴を持つ、日本化＝定型化が完成した段階とした。菱田氏は、「日本化」の特徴として、甕の長い頸部に数段を区切って波状文を巡らすことや、無蓋高坏の身や脛に波状文を入れる装飾化、供膳具として蓋坏の選択があげられるとした〔菱田1999〕。

しかし、大甕の波状文について、2a段階の大庭寺TG 231・232号窯にわずかに突線で区画し、何段かの波状文を施す例がすでにあり、その後のON 231号窯、濁り池窯跡にもわずかながら存在する。加耶においては大甕に波状文を施さないのが一般的であり、その系譜を別に求める必要がある。全羅北道扶安郡竹幕洞祭祀遺跡では、波状文を施す甕や大甕が出土し、その中には壺も含め須恵器に酷似した陶質土器が含まれている。また、全羅道出土の脛には全羅南道靈岩万樹里2号墳・4号墳、務安・社倉里ノルボン甕棺のように波状文を持つ脛が存在する。このように波状文は必ずしも倭の中だけの変遷だけで理解できない。

次に、蓋坏の選択についてであるが、大庭寺窯跡TG 232号窯にはわずか4点の坏身が出土する。ON 231号窯では3点の坏身が、TK 73号窯も数はまだ少ない。須恵器の坏身は大庭寺窯跡TG 232号窯では平底であることが特色で、それはTK 73号窯跡まで続く（図5）。その後TK 216号窯で丸底化して量的に増加し定型化する。蓋坏は、初期須恵器と並行する時期の加耶にはほとんどなく、百済地域の漢江・錦江流域や柴山江流域にあるが平底である（図11・12）。柴山江流域の坏蓋はつまみは見られず、倭の須恵器と類似する。また製作技法の上でも回転ヘラ削り・底部未調整技術で共通し、形態の上でも坏蓋につまみがない点で類似する「同一技術圏」といえよう（図3）。

このように「日本化」する須恵器として考えられてきた須恵器は、当初加耶系の陶質土器工人在伝えた加耶系須恵器が入り、それが定型化して「日本化」したという倭の中での内的変化と捉えられている。当時の倭においては陶質土器の技術は一度入っただけでなく、何度も繰り返し入ってきたと考えられ、「日本化」という変化は柴山江流域からの外的要因が大きく関わっていたと考えられる。この柴山江流域との関連は、5世紀後半から6世紀前半の柴山江流域の前方後円墳、埴輪などに見るように、倭と朝鮮半島各地の交流の中から解釈すべき重要な問題を含んでいる。

④……………倭における平底坏の系譜とその問題点

ここでは倭に取り入れられた平底坏について稿を改め検討する。

大庭寺TG 232号窯には4点の平底坏が出土する。大庭寺窯跡は加耶系というのは周知の事実である。しかし、申敬澈氏は当時の加耶には坏が存在しないという。ではどこからこの器形は来たの

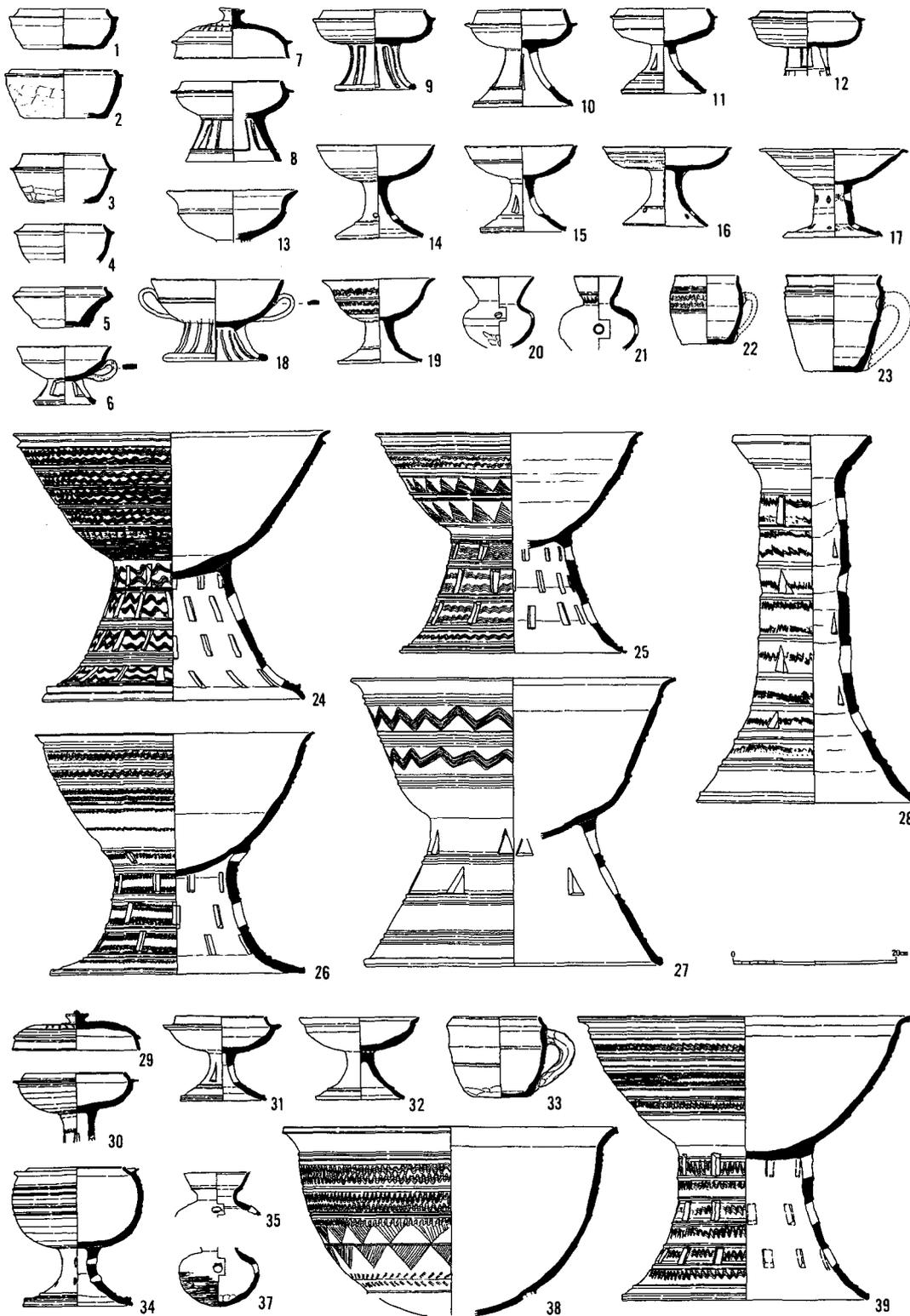


図9 大庭寺窯跡出土須恵器

であろうか。前述したように新鳳洞B地区1号土壙墓〔忠北大学校博物館1990〕からTK 208~23型式の須恵器⁽³⁾に伴い百済土器の蓋坏が3組出土する(図10)。この蓋坏は平底でこの時期の百済土器が平底であることが分かる。この時期の漢江・錦江流域の百済土器やその影響を受けた栄山江流域の土器の坏は平底で、底径が広いものから新しくなると狭くなる傾向がある〔朴淳發2001〕(図12)。大庭寺TG 232号窯の坏は新鳳洞B地区1号土壙墓例と同様広い。大庭寺遺跡例に百済土器に類似した短い口縁が見られることから、百済および栄山江流域も含めた地域の平底坏にその源流が求められよう。新鳳洞古墳群に近い天安龍院里古墳20号土壙墓〔公州大学校博物館2000〕から出土した鉢形土器(図13)は口縁部など倭の初期の坏形態と類似する点があり、このような土器から大庭寺窯跡、同遺跡の坏は当初は蓋を持たない碗の可能性はある。

ではなぜ加耶系の大庭寺窯跡から出土する坏が百済・栄山江流域系であろうか。大庭寺窯跡にはこのほか百済・栄山江流域系の土器として甗が伴う。

申敬澈氏は金官加耶の支配者集団が日本へ移住し、須恵器を伝えたという。前期加耶連盟に栄山江流域も含まれていたため持ノ木古墳の坏や大庭寺窯跡の甗が伝わったとして、持ノ木古墳の坏(図5-1)を栄山江流域系とする〔申敬澈2000〕。加耶には坏がないことを根拠に栄山江流域系とするが、5世紀初頭段階の栄山江流域の坏は不明確である。百済地域の坏の中に丸底を見出すことは難しく、また持ノ木古墳の坏の底部はケズリの後にナデを施すが、百済・栄山江流域にはない技法で、加耶の高坏坏部やのちの蓋坏に見られる技法である。さらに持ノ木古墳の坏の口唇部は面取り状の矩形となり、共伴する加耶系の高坏、蓋の作りと共通している。これは百済土器にはあまり見られない形態である。このようなことから持ノ木古墳の坏は百済・栄山江流域の土器ではないと想定する。持ノ木古墳出土資料のほとんどが、加耶でも釜山・金海地域の土器に限定できることから、坏だけが栄山江流域系とするのは難しいと考える。

それに対して大庭寺窯跡の坏(図5-6~9: TG 232号窯, 10・11: 大庭寺遺跡)は明らかに百済あるいは栄山江流域との関連があり、さらに甗も一定量出土することはこの時期加耶だけではなく、栄山江流域からも工人が来た可能性がある。先に提示したように問題は、ほとんどが加耶系で占められている中になぜ百済・栄山江流域系の坏と甗が存在するのであろうか。

持ノ木古墳→大庭寺窯跡と続く加耶系の土器は、倭が朝鮮半島で新羅に対抗するために活動する地域から陶質土器を取り入れたことと関連するが、その時期軍事同盟関係にあった百済あるいは栄山江流域からも土器の技術を取り入れたのであろう。その際大庭寺窯跡を見ると加耶にない蓋坏あるいは甗という器形を選択して取り入れたのであろう。その土器技術は同時期導入した倭の各地でそれぞれ系譜が違っていた考えられる。また、福岡県朝倉窯跡群では甗は選択をしたものの、蓋坏は除かれたように取り入れた器形にも違いがあったようである。

このように大庭寺窯跡の坏については百済・栄山江流域地域が想定されるが、近年増加している朝鮮半島の須恵器の出土と関連があろう。この地域の坏蓋が平底であることから倭が取り入れた坏蓋が平底でその後丸底化したのに対して、百済・栄山江流域では平底のままであったのであろう。問題点の一つは、栄山江流域の坏と甗は平底が主体であり、同じ地域から導入した甗がTG 232号窯の段階からなぜ丸底であるのかである。福岡県朝倉窯跡群山隈窯跡の甗は平底であるが、朝鮮半島にも丸底の甗が存在し、近畿では土師器が丸底であることから早い段階に丸底が選択され倭の器

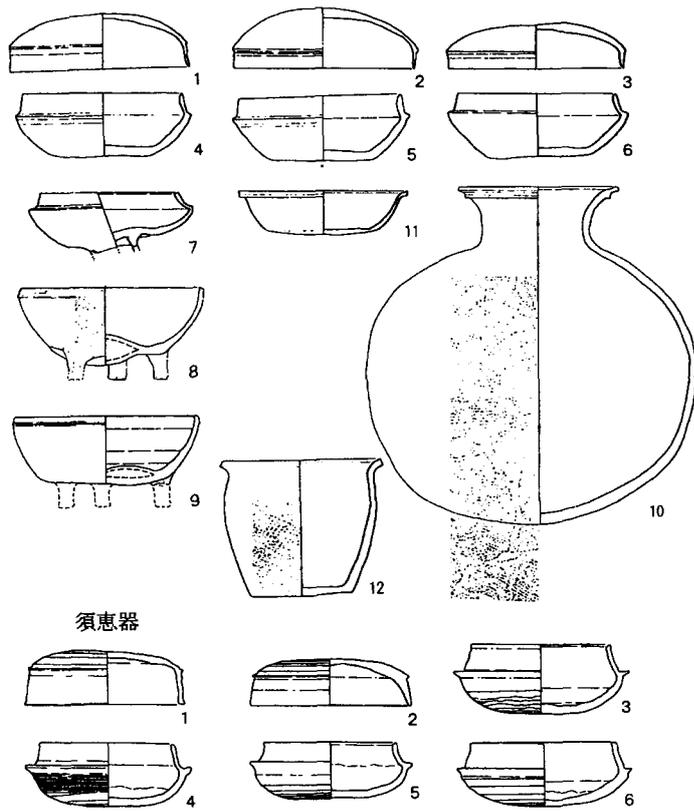


図10 忠北清州市新鳳洞B地区1号土壌墓出土土器

| | 新村里9号墳陶質土器 | 須恵器(陶邑窯) |
|-----|------------|----------|
| 1段階 | | TK216 |
| 2段階 | | TK208 |
| 3段階 | | TK23 |
| | | TK47 |
| 4段階 | | MT15 |
| 5段階 | | TK10古 |

1. 萬樹里古墳 2. 辛棺 3. 丙棺 4. 壬棺 5. 墳丘上
6・7. 丁棺 8. 戊棺 9. 石溪91-4号墳 10~15. 陶邑窯

図11 新村里9号墳陶質土器と須恵器との並行関係 [小栗2000]

| 地域 | 錦江以北地域 | | | 錦江流域 | | | | 梁山江地域 | | | |
|-------|--------|--|--|------|--|--|--|-------|--|--|--|
| 漢城I期 | | | | | | | | | | | |
| 350年 | | | | | | | | | | | |
| 漢城II期 | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |
| 475年 | | | | | | | | | | | |
| 熊津期 | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |
| 538年 | | | | | | | | | | | |
| 泗北期 | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |

1. 夢村土城88-4号住居址 2. 夢村土城85-1号住居址 3. 石村洞葺石封土墳 4. 夢村土城西南地区(89年調査) 5. 夢村土城88-2号住居址 6. 清州新鳳洞90-3号土壌墓 7. 石村洞3号東側6号土壌墓 8. 夢村土城87-3号住居址 9. 新鳳洞92-2号石室墓 10. 新鳳洞92-80号土壌墓 11. 新鳳洞90-B1号土壌墓 12. 新鳳洞90-32号土壌墓 13. 夢村土城85-3号貯蔵孔 14. 新鳳洞90-B1号土壌墓 15. 益山笠店里4号竪穴式石槨 16. 益山熊浦里86-20号石室墳 17. 益山羅浦里7号石室墳 18. 靈岩内洞里80年取捨調査甕棺 19. 靈岩萬樹里2号墳4号甕棺周辺 20. 羅州新村里9号墳 21. 羅州徳山里4号墳甕棺内 22. 羅州大安里9号墳甕棺内 23. 靈岩チャラボン前方後円墳 24. 公州艇止山23号住居址 25・26 艇止山地積下層 27. 論山表井里タンゴル5号石槨墓 28. 艇止山地表 29. 艇止山17号貯蔵孔 30. 益山新龍里窠址 31. 扶余汾江・楮石里28号墳 32. 内洞里5号墳甕棺内 33. 光州双岩洞石室墳 34. 光州明花洞前方後円墳 35. 双岩洞石室墳 36. 海南月松里造山横穴式石室墳 37. 長城鈴泉里石室墳 38. 咸平石溪91-4号石室墓 39. 論山表井里トクモリ1号石槨墓 40. 論山六谷里2号石室墓 41. 咸石溪90-4号石室墓

図12 百濟蓋坏の変遷と梁山流域の蓋坏の比較 [朴淳發2001]

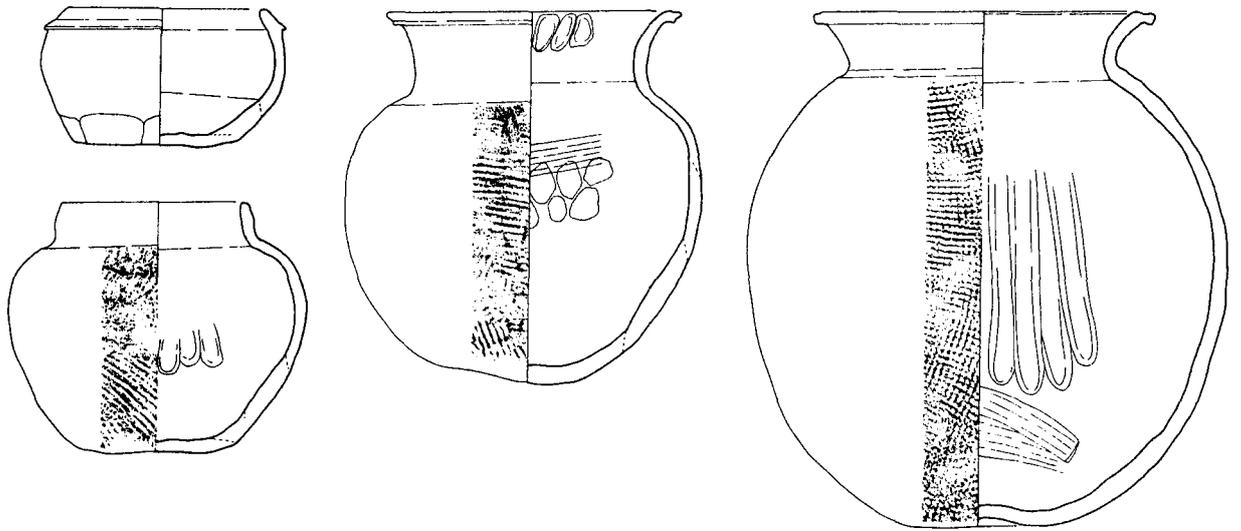


図13 韓国天安市龍院里古墳群20号土墳墓(1/4)

形として定型化していったのであろう。これに類似した選択例としてTK 216号窯の両耳付壺は、錦江・榮山江流域に平底・丸底の両者が分布する(図4)のに丸底だけが選択されていることが上げられる。

問題点のもう一つは図12に見るように平底坯は量差は別にして漢江から榮山江まで出土するが、百済が遷都した熊津(公州)の錦江流域ではもう一つの百済土器である三足土器が多く出土する。さらに艇止山遺跡に見るように須恵器類似品も出土する。榮山江流域では三足土器はなく須恵器類似品が多くなっていく。この両地域の須恵器類似品が百済土器の平底坯の系譜上にあるのか、須恵器が流入したのち模倣された器形なのか問題である。明らかに平底を意識した土器は百済土器の系譜を引くと想定できるものの、丸底に近く蓋受け部を作り出す器形もある。その出現時期も問題であるが、小栗明彦氏は榮山江流域の新村里9号墳1段階をTK 216型式とする[小栗2000](図11)。小栗氏の1段階の坯身は平底で、2段階以降の蓋坯が須恵器類似品といえよう。もし須恵器類似品が須恵器を模倣したとするならば、須恵器を模倣した土器が百済にとって重要な艇上山遺跡から多く出土する意味を考えなくてはいけない。また、一方榮山江流域の須恵器類似品も須恵器模倣品としたならば、榮山江流域を須恵器の故地とすることができなくなる。須恵器類似品が百済平底坯の系譜なのか、須恵器の模倣品なのかによってその評価は大きく違ってくる。現在の見通しとして、倭から搬入された須恵器以外に、榮山江流域には大きく分けて三つの系譜があり、百済系・榮山江系・須恵器系が存在すると考えている。窯がわずかである現在、系譜関係は今後の課題としたい。

⑤……………須恵器生産開始の目的

なぜ倭に須恵器が導入されたのか、須恵器生産導入の目的について検討してみよう。須恵器は宝器から供献具へ変遷し、その原因の一端が須恵器の生産性の高さに起因するとした見解がある。はたして須恵器は導入当初、宝器であったのであろうか。

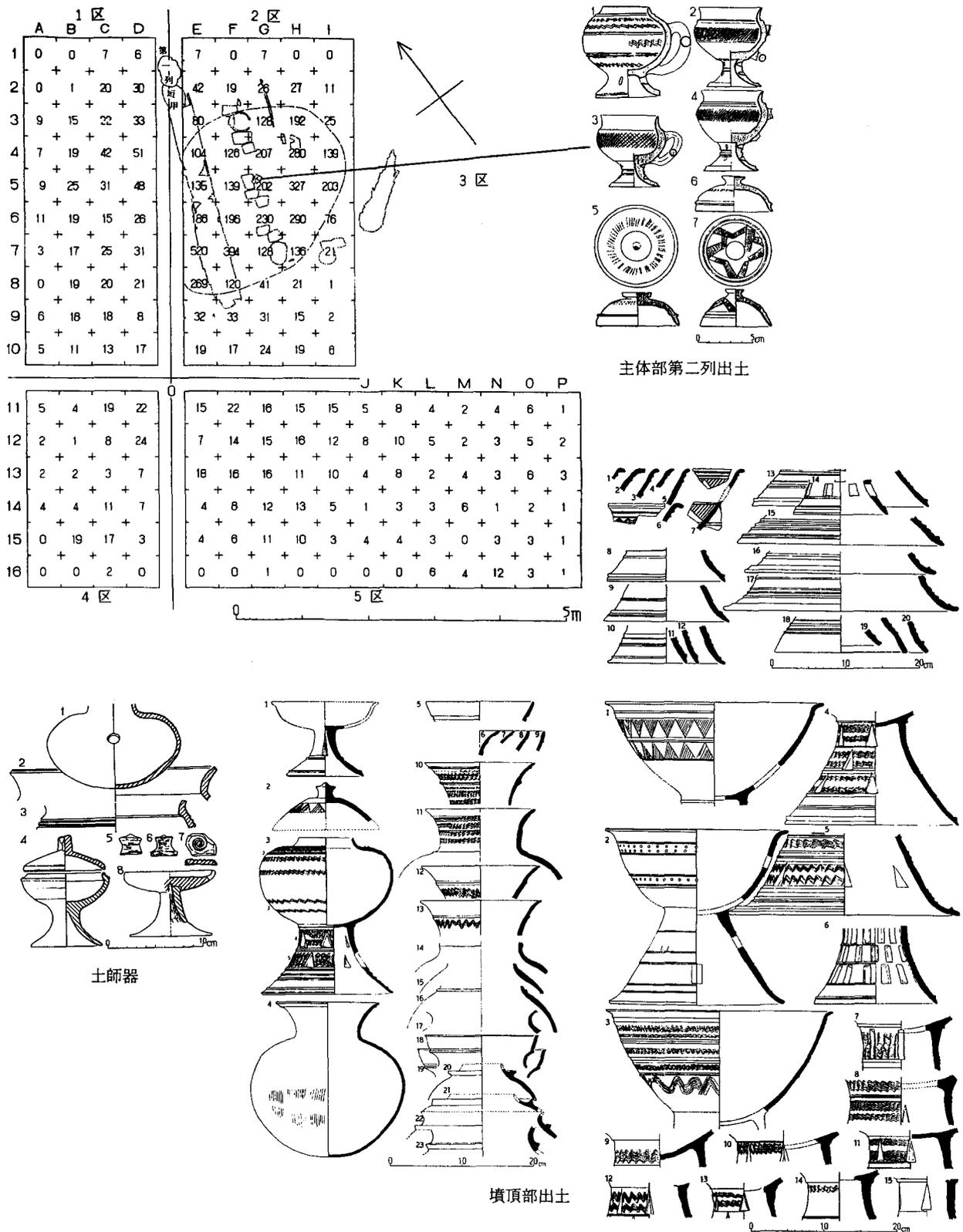


図 14 野中古墳墳頂部土器分布数および主体部と墳頂部出土土器

まず、最初に倭においてどのような器種が生産されたのか、初現期須恵器の器種構成を見てみよう。現段階で最古の窯である大庭寺窯跡の器種構成は、大甕は600個体以上で40%、壺13%、器台14%、小型壺・短頸壺10%、高坏20%などで、坏は4点とわずかで0.2%、甗は20点で1.2%と少ない(図9)。大甕と壺の貯蔵容器が主体を占めている。また、その中で壺類とセットになり古墳などへの供献土器として使われる器台が多いことは注目される。中村浩氏は、陶邑編年I型式1~2段階の初期須恵器をA期として、TG 22号窯をあげられ、器種構成は甕85%、蓋坏8%、壺1.2%、高坏0.3%、甗0.09%で、器台は0.01%であるとし、このような器種構成はほかにTK 73・85号窯など初期の窯跡に共通するとした。中村氏のA期も、貯蔵容器が主体で、蓋坏が増加し始めるものの、器台が激減する。中村氏B期のTG 207号窯とTG 43-Ⅲ号窯は、甕が前者は60.94%、後者が51.4%とやはり貯蔵器種が主体であり、蓋坏はさらに増加し、器台は減少したままである[中村2001]。

それに対して初現期須恵器を出土する古墳を見てみよう。大阪府藤井寺市野中古墳からは、主体部第2列から小型把手付壺4、同蓋3点が出土するだけで、墳頂部から多く出土し、器種の確認できるだけで57点ある。器種構成は器台・高坏脚台46%、壺類37%、有鍔土器7%、高坏蓋7%、高坏2%などであり、甕は出土していない(図14)。岸和田市持ノ木古墳では本来墳丘におかれていたものが周溝から出土しており(図7)、35点のうち器台31%、壺類29%、小型壺類17%、高坏11%、坏身2.9%、小型器台2.9%、鉢2.9%、甕2.9%である[虎間1993](図6)。この両遺跡出土の土器は、須恵器とともに陶質土器も共存するが、須恵器生産開始時期の古墳への土器使用の実態が分かり、甕の少なさが指摘できる。これに対して朝鮮半島の集計が中村浩氏によっておこなわれている[中村2001]。釜山華明洞古墳群では壺40.3%、高坏27.4%、器台12.9%、甕11.3%、慶州皇南洞110号墳、味鄒王陵前地域古墳群は高坏40.2%、壺27.8%、甕16.5%、蓋坏4.1%、器台1%という。貯蔵容器は前者が51.6%、後者が44.3%となるが、大甕に限ると前者は11.3%、後者が16.5%であり、列島よりも古墳から甕の出土する割合は少し多いようである。

このように生産遺跡と古墳の器種構成の比較をすると、列島では古墳からは甕類がほとんど出土しないことが指摘できる。また、器台と壺および高坏は古墳からも多く出土する。須恵器生産開始期の器種構成から見た須恵器導入の目的は、器台・壺・高坏に見るように古墳などでの供献土器の生産であろう。しかし、最も生産の割合が高かった甕類は古墳から出土しないのは、どのように考えるべきであろうか。

甕は大庭寺窯跡では600個体以上で40%で、その後のTG 22号窯でも85%と主体的に焼成される器種である。和歌山市鳴滝遺跡では大規模な掘立柱建物跡群が確認されているが、そこから大甕が50個体以上出土したという。この掘立柱建物跡は倉庫と考えられ、大甕は実用的な貯蔵容器と考えられる。この倉庫群は倭王権の倉庫群といわれるが、初現期の須恵器導入が各地の首長層によって行われた可能性が高いことから、鳴滝遺跡や大阪府法円坂遺跡の巨大倉庫群に代表されるような倉庫群が各地に作られ、各地首長層の余剰生産物や貢納物の貯蔵機構と連動した、貯蔵機能を目的に大甕が導入されたのであろう。須恵器生産がすぐに畿内中枢部の周辺部にあたる、陶邑窯跡群に集中していく理由はここにある。このような須恵器生産は、周辺部に配置されたことから考えると、当時の畿内政権が須恵器生産を直接掌握する方式でなく、貢納による調達方法をめざした

ようである。それは律令期においても須恵器は官営工房でなく、特定の国が調として貢納することから想定できる。

器台は、持ノ木古墳では31%、野中古墳では高坏脚部も含め46%、大庭寺窯跡では14%と初現期には多い器形である。ところが続く陶邑TG 22号窯では0.01%、TK 73・85号窯も同様少ないという。このことは当初加耶でも多い器台を取り入れたものの、器台を使う供献は加耶ほど普及せず、さらに器台の少ない百済・栄山江流域系に変遷していったことも要因の一つかもしれない。

須恵器はその後、甗が倭の社会での祭祀具として重要な位置を占めていく。TG 232号窯では少ないながら甗が20点出土しており、ON 231号窯では甗が急増し、大庭寺窯跡ではなかった樽形甗も生産される。これは倭が甗を新たな祭祀具として早い段階で採用し定型化していったのであろう。

これに対して同じ栄山江流域・百済地域の系譜を引く蓋坏の採用はわずかに遅れる。ON 231号窯では3点が報告され(図5-18~20)、鉢も含めても10点前後と少ない。濁り池窯跡、TK 73号窯になって順次増加していく。蓋坏は供膳具としての性格が強く、その点で採用が遅れ、形態も定まらず甗よりも定型化するのが遅れたようである。蓋坏は、朝鮮半島から渡来人がたずさえてきた軟質土器の甗・塀・長甗・小型深鉢土器やカマドの導入に伴う、新たな食生活の変化と関連し、倭における手持食器による銘々器の確立という供膳具の成立と連動する実用器種となっていく、土師器の形態にも採用されるなど影響を与えた器形である。

このように初現期の須恵器生産の開始当初の目的は、宝器としての生産でなく甗・壺は貯蔵容器という実用器種であり、器台・高坏などは供献具であったと考えられる。ただし、その須恵器が流通下においては、希少性から宝器的扱いを受けた可能性はある。加耶における陶質土器は、墳墓への副葬品として多く用いられているが、特に畿内およびその周辺部では大阪・野中古墳や堂山1号墳など墳丘から、京都・奈具岡北1号墳のように棺上から出土しており、主体部から出土する例は少なく、たとえ出土しても朝鮮半島と比較しても量的にわずかである。おそらく副葬品として埋納する行為を導入せず、それまでの土師器を使った供献の延長上にあった可能性がある。これは福岡県甘木市古寺・池の上墳墓群で主体部から出土する例が多いことと相違する。古寺・池の上墳墓群は渡来人の墳墓と想定されていることから当時朝鮮半島での埋納方法を実施したのであろう。韓国において墳丘からの供献土器が発見され、研究も進められており[金東淑 2002]、倭の墳丘土器供献とどのように関わりあるのか、今後列島との比較研究[土生田 1998]により検討すべき問題である。

⑥……………須恵器の年代

須恵器生産の開始年代については、5世紀後半、5世紀中葉、あるいは5世紀前半、さらに4世紀末など諸説ある。しかし、大庭寺TG 231・232号窯が発掘されてから5世紀前半代とする見解が多いようである。その理由の一つとして埼玉稻荷山古墳出土の辛亥銘鉄剣の年代を471年とし、稻荷山古墳出土の土器年代をそこから求めるためである。また、大庭寺TG 231・232号窯から出土する須恵器と、韓国出土の陶質土器との並行関係から求めることもある。

しかし、稻荷山古墳の辛亥年を531年とする見解や、須恵器と陶質土器の並行関係の見解の相違など問題点も多い。⁽⁴⁾

まず、現在判明している須恵器の変遷は、持ノ木古墳→大庭寺TG 231・232号窯→ON 231号窯・濁り池→TK 73号窯→TK 216号窯である。いずれも陶邑窯跡群やその近隣である。これとほぼ並行する韓国釜山福泉洞古墳群の編年は、申敬澈氏による31・32号墳→21・22号墳→10・11号墳→53号墳であるが[申敬澈1992]、最近申氏は25・26号墳→21・22号墳→8・9号墳→10・11号墳とする[申敬澈2001]。福泉洞25・26号墳は大成洞1・7・11号墳に並行するというが、福泉洞31・32号墳も同様並行し、持ノ木古墳の器台(図6-28・29・30・31)と酷似した器台が出土することから、申氏の25・26号墳の代わりに以下では以前からの申氏の31・32号墳を使う。

持ノ木古墳の須恵器と共伴する陶質土器は、福泉洞31・32号墳に並行していることは、日韓の研究者の認めるところである。

続く大庭寺TG 231・232号窯が問題である。大庭寺TG 231・232号窯出土の器台には、波状文・組紐文・鋸歯文を多用し、鉢部口唇部下の突線も明瞭に作り出され、脚部が細いなど古い様相が見られる(図9)。また、製作時に割れ目が入った時の補修に布を当ててその上に粘土を塗る手法は、昌寧余草里窯跡にも見られる技法で、倭でもON 231号窯にも見られる初現期須恵器の技法である。それに対して新しい様相として鋸歯状の山形波状文(図9-27)があり、福泉洞10・39号墳に見られる。また、器台の器高が21cm、30~35cmと小型品が多く、福泉洞10号墳の大きさに近い。大庭寺TG 231・232号窯の器台は、透しがほとんど長方形で交互透しである。高杯の透しも長方形、三角形、円形および多窓透しなど様々であるが、前者は加耶の様相が、後者は新羅の様相が見られるものの、その割合は加耶の様相を持つ器形が多い。

大庭寺TG 231・232号窯に加耶の様相がまだ多く見られることから、福泉洞10・11号墳の段階まで至っていないとすることもできるが、大庭寺TG 231・232号窯の加耶の様相は福泉洞古墳群の地域よりも西方の様相が反映されており、新羅・加耶の系譜の量差から前後を論議できない。そのためいくつかの類似する形態の比較から検討する。

大庭寺TG 231号窯の無蓋高杯(図9-32)は、洛東江下流域に系譜の追える高杯で、礼安里87・94・110号墳(礼安里Ⅱ)、華明洞2号墳、七山20・27号墳に類例があり、福泉洞22号墳までで消滅する4世紀から続く古式の器形である。また、TG 232号窯の有蓋高杯には9方透し(図9-9)があり、福泉洞10・11号墳に続く53号墳に類例がある。しかし、杯部と口縁部の立ち上がりはTG 232号窯の方が深く、古い様相を持つ。TG 232号窯には新羅の様相である高杯脚部の2段交互透し(図9-12)が存在するが、多量の高杯の中で3例だけであり、福泉洞10・11号墳ではほとんどが2段交互透しで占められており大きな違いである。TG 232号窯では他に新羅の要素として多窓透しの高杯が12点伴うが、全体の量からすれば加耶系が多い。このように高杯から見て、大庭寺窯跡は福泉洞10・11号墳の段階よりも遡ると考える。

器台について再度福泉洞古墳群の様相を見てみよう。福泉洞21・22号墳の器台は加耶系で鉢部も丸く、鉢部と台部の接合する基部は細い。また、鉢部の深さと台部高はほぼ1:1前後である。ただ1例だけ基部が太く、鉢部が深い新羅の様相を持つ例が出土する。続く福泉洞10・11号墳では基部が太く、鉢部が直線的に立ち上がる新羅系が主体となり、鉢部と台部の割合は1:0.73~0.95と台部が低くなる。ところが後続する福泉洞53号墳は、再び基部が細く鉢部が丸い加耶系の器台と、基部が太く鉢部が直線的に立ち上がる新羅系器台の2種になる。鉢部と台部の割合は、加

耶系が1:1.1~1.24と台部が高くなり、新羅系が1:0.55~0.82と福泉洞10・11号墳よりもさらに台部が低くなる。すなわち器台は福泉洞10・11号墳の段階ですべて新羅系になるのではなく、福泉洞53号墳の段階でも、加耶系と新羅系の両者が共存することから、2系統が存在するのである。

大庭寺TG 231・232号窯の器台は基部が細いことが福泉洞10・11号墳と違う大きな特色で加耶系の様相であり、鉢部と台部の高さの割合は1:1前後であり、福泉洞21・22号墳に近い。しかし、福泉洞21・22号墳の器台は鉢部が深く丸みを持つものに対して、大庭寺窯跡は直線的に立ち上がる形態や、小型化する新しい様相を持つ。大庭寺TG 232号窯の鉢部に鋸歯状山形波状文を持つ交互透しの新羅の様相の器台は、最も新しい様相であるが、この新しい様相から福泉洞10・11号墳の段階あるいはそれ以降とする見解もある。大庭寺窯跡の鋸歯状山形波状文の器台は、1例のみの出土であり、三角形透しで器台の基部が細い加耶の様相をまだ持つことから、福泉洞21・22号墳から10・11号墳の間と考えたい。

持ノ木古墳出土と大庭寺TG 231・232号窯の高坏蓋は形式的に連続性を持つことから、やはり大庭寺TG 231・232号窯は福泉洞10・11号墳段階よりも遡らすべきであろう。

韓国における福泉洞古墳群の年代は、25・26号墳(30・31号墳)が420年代、21・22号墳が5世紀前半⁽⁵⁾、10・11号墳が440年代か450年代とする。

では日本の資料から年代を考えてみよう。現在埼玉稲荷山古墳辛亥銘鉄剣の年代を471年として、須恵器年代が考えられてきた。これに対して辛亥年を531年とする見解があるので検討してみよう。日本の須恵器編年は田辺昭三氏の陶邑編年がある。TK 73→TK 216→(ON 46)→TK 208→TK 23→TK 47→MT 15→TK 10→MT 85→TK 43→TK 209→TK 217である[田辺1981]。年代は5世紀前半から7世紀前半である。日本における年代が明確な飛鳥時代の須恵器から見ていきたい。飛鳥寺下層の須恵器TK 43型式の年代は、飛鳥寺造営時の整地層下層から出土することから、造営開始年代588年に一点がある。近年発掘の飛鳥寺西回廊基壇、南石敷広場下層出土の須恵器は、飛鳥I型式、すなわちTK 209である。飛鳥寺回廊の完成は592年であることから、TK 43→TK 209はおよその年代が求められる。また、豊浦寺講堂下層から出土した須恵器は、豊浦宮と関連するならば593年以前となるが、この須恵器はTK 209型式における[西口1999]。大阪府狭山市狭山池北堤窯跡は、灰原が狭山池の堤である第1次堤体の北側斜面に広がる。下層の東樋下層遺構が検出され、その樋管に使われたコウヤマキ材の年輪年代は616年である。樋管設置後に堤を築造し、その堤を利用して窯が築かれている。須恵器はTK 217型式であり、その上限が616年である[植田1998]。すなわちTK 43→TK 209→TK 217型式の年代的矛盾はない。

このように6世紀末から7世紀初頭の実年代の分かる須恵器が存在することから、TK 43型式は588年を下限とすることができる。

最近、古墳時代中期の年代について、いくつかの理化学的な年代が出されている。平城宮下層遺構溝SD 6030上層から、須恵器出現期の土器群が出土し、TK 73型式の須恵器が伴う。共伴する木製品は、年輪年代で412年に伐採したという[光谷・次山1999]。木製品の廃棄までどれだけの年数あったのか不明確であるが、未製品であったことから長く伝世したと考えられないものの、両者の出土位置も離れており須恵器の年代にそのまま援用できるか検討は必要である。陶邑ON 231号窯では放射性炭素法年代が 410 ± 80 、 390 ± 80 、福岡県山隈1号窯では地磁気法で 450 ± 10 、福岡県

居屋敷窯跡では地磁気法で 440 ± 10 である。また、ON 46 型式並行という大阪府高槻市新池A群1号埴輪窯が、地磁気法で 450 ± 10 、MT 15 型式並行のC群18号埴輪窯が 520 ± 40 、鳥根県日脚窯跡はTK 47 型式並行で、地磁気法で 480 ± 20 という。しかし、ここに提示した理化学的な年代は、このような好都合な資料ばかりではなく、年代の違う資料も多く問題も多い。今後十分な検討も必要である。

再度稲荷山古墳の問題に触れてみる。稲荷山古墳の辛亥年を531年にする考え方と、考古学的に稲荷山古墳の年代を520~530年とする見解がある〔金斗喆1996〕。

ここで稲荷山古墳のある埼玉古墳群の変遷から検討してみよう。この地域には群馬県榛名山二ツ岳が噴出した火山灰(FA)が堆積する。FAは須恵器のMT 15 型式の時期に噴出したという。FA堆積下層にはTK 47 型式の須恵器が出土することから、当地域の層位学的変遷に利用されている。稲荷山古墳はFAが周溝の底から浮いていることから、FA降下以前に築造されている。二子山古墳はFAが堀底に堆積し、丸墓山古墳は墳丘下の旧表土上に堆積する。出土須恵器は、稲荷山古墳がTK 23~47の間、二子山古墳がTK 47、瓦塚古墳がMT 15~TK 10、鉄砲山古墳がMT 85~TK 43、將軍山古墳がTK 43、中の山古墳がTK 209である。古墳群は火山灰、古墳の形態、出土須恵器から稲荷山→二子山→丸墓山→瓦塚・奥の山→鉄砲山→將軍山→中の山と続く〔埼玉県教育委員会1997〕。仮に稲荷山古墳を520~530年とすると、將軍山古墳までの50~60年の間に5基の同一首長系譜の古墳が作られたことになる。首長が約10年ごとに交替したとは考えられない。

このように稲荷山古墳の年代を520~530年に下げた場合、型式や稲荷山古墳群の変遷から見てもそれぞれの間隔が詰まりすぎる。やはり辛亥年は471年(6)が妥当であろう。

ソウル夢村土城第3号貯蔵穴からTK 23 型式の須恵器(6)が出土する。百濟土器と共伴しており、百濟が熊津へ遷都する475年以前の漢城時代の土器と想定でき、TK 23 型式の重要な年代推定資料になろう。

須恵器生産の開始年代は、持ノ木古墳出土土器が須恵器と考え、それ以降の大庭寺TG 231・232号窯など初現期須恵器窯が各地において同時期に操業開始することから、近年の木器による年輪年代から考古学的年代が遡る傾向があるものの、その操業の要因を朝鮮半島の情勢と結びつける立場から、現段階では5世紀初頭としたい。

⑦……………倭国と朝鮮半島三国

すでに指摘されている柴山江・錦江流域に見られる倭との類似点は、遺構では前方後円墳、横穴式石室、遺物では甲冑、石製模造品、埴輪、軟質土器の甌、円筒形土器、鳥足文叩き、須恵器類似品、搬入された須恵器、両耳付壺、須恵器甌の1+4の孔などがある〔朝鮮学会2001〕。これらの類似点は前方後円墳などから5世紀後半といわれるが、須恵器から見るとどうであろうか。

申敬澈氏は高句麗南下に伴う新羅の洛東江流域への進出により、金官加耶の大成洞古墳群が築造中断し、同時に韓半島南部の住民が近畿に移住したという。そのさい倭に洛東江下流域だけでなく全羅道にかけての陶質土器技術が伝わり、須恵器が出現したという。持ノ木古墳出土の坏を柴山江流域系と考えて、柴山江流域も前期伽耶連盟の領域とした。申氏は金官加耶の滅亡を大成洞1・

7・11号墳の段階の420年代とし、持ノ木古墳はその直後とする。また、大庭寺TG 232号窯を440年代とする⁽⁷⁾。

持ノ木古墳の坏は前述したように丸底で、底部の削りがナデ消され、栄山江流域系ではないと考えられる。また、栄山江流域との関連が強くなるのはむしろ後のTK 73型式段階である。すなわち須恵器から見るならば、加耶系→栄山江流域系と順次変遷したようで、須恵器から見る栄山江流域から倭への技術伝播は、加耶地域から倭への技術伝播の後に起こった動きといえよう。そのことは須恵器が百済・栄山江流域で確認できるのは、TK 208型式以降順次増加することからもいえよう。また、申氏は金官加耶の住民、あるいは韓半島南部の住民が近畿に移住したというが、畿内には栄山江・錦江流域と関わりある軟質土器が主体で、金官加耶と想定される軟質土器は主体ではない。金官加耶滅亡問題と移住の問題は切り離して考える必要があろう。

倭の中で、ある時期福岡から愛知までの各地に、一斉に加耶系でそれも各地で異なる様相の須恵器が生産開始された意義は、倭の中での陶質土器の導入という欲求だけでなく、朝鮮半島における情勢も大きな要因であろう。その最大の要因は、やはり高句麗の南下による加耶の不安定な状況であり、その時期倭へ渡った人々によってもたらされたのが須恵器といえよう。また、須恵器から見る加耶系→栄山江流域系の変遷は、当時の朝鮮半島の動向と密接に関連しており、須恵器はそれを反映していると考えたい。

前述したように、1段階に百済から瓦質土器の窯が伝わり、須恵器は2aの段階には加耶系で2bの段階には栄山江流域系であった。そして、2aの段階は各地の首長層それぞれが工人を迎えて操業を開始しており、その後2b段階に畿内政権の中核の周辺地域に集約されて操業が行われる。このような窯業技術の導入について、倭と朝鮮半島三国の関係から見てみよう。

当時の動静を記した好太王碑によれば、高句麗と倭との交戦について記されている。辛卯の年(391)に倭が高句麗の属国であった百済を破り属国としたこと、永楽九年(399)には百済が倭と親交を厚くしていること、永楽十年(400)には高句麗は歩騎五万で新羅救援のため新羅城に入り倭を退け、追って任那加羅の従拔城に至り帰服させたことあり、百済・倭・加耶の連合軍と戦ったことが記される。また、永楽十四年(404)には倭が百済の西海岸から帯方界の高句麗領まで侵入したが、敗れたこと、永楽十七年(407)には高句麗が歩騎五万で倭と考えられる相手と戦い勝利し、甲冑万余領などを押収したことが見られる。これ以降しばらくの間、高句麗対倭との交戦は見られない。

この時期、倭が朝鮮半島南半、それも新羅への侵攻から見るに倭から最も短距離で渡海できた、朝鮮半島東南部の加耶経由で北上した戦いが主体であったのであろう。404年の高句麗領への侵攻は、西海岸から北上したのは百済の協力があつたからであろう。同様に高句麗対百済の戦いも長く、『三国史記』などでは369年をはじめ50余年に18回の戦いが続けられた。百済は高句麗の南侵を防ぐため、倭と通好しその関係は長く保たれた。それに対して新羅と倭の関係は、『三国史記』では364年の戦いはあるものの、402年新羅が倭に奈勿王子未斯欣を質として送り通好したようであるが、新羅は高句麗とも通好を結び百済と敵対したことから、倭の侵攻を受けることが多かった。このような諸国関係の中で、碑文から400年頃、倭・百済・加耶対高句麗・新羅の関係であったことが分かり、百済と加耶、倭は高句麗、新羅の侵攻を防ぐため同盟したのであろう。

洛東江流域を見ると、西岸の釜山・福泉洞古墳群出土の土器は、31・32号墳にわずかに新羅様式が入り、21・22号墳にはさらに増加することから、土器からも新羅の影響が順次増加していることが見てとれる。倭の2a段階の初現期須恵器は、当時同盟関係にあった加耶各地の工人の渡来によって操業が開始されたのであろう。その時、畿内・瀬戸内地域は加耶でも東部から、北部九州は加耶でも西部から主体的に渡来したようである。その時期は5世紀初頭から前半にかけてのことと考える。

ではこれを遡る1段階の出合窯跡はなぜ存在するのであろうか。田中俊明氏は好太王碑以前の4世紀後半、高句麗に対抗するため加耶南部諸国を介して百済と倭が軍事同盟関係に入ったという[田中2003]。このような状況の中で出合窯跡は百済の地から伝わったのであろう。しかし、なぜ加耶でなかったのか疑問である。この窯は構造窯であるにも関わらず焼成したのは瓦質土器で、しかも甌・壺という日常什器である。2a段階に伝わった硬質の土器は朝鮮半島では主に墳墓に副葬する土器であることと大きな違いがある。おそらく1段階の構造窯を使用した土器製作技術は、渡来人の移住に伴い渡来人のために土器生産した窯であろう。2a段階の首長層が導入した構造窯とは操業の目的が違うのである。その点では加耶地域をはじめ各地の渡来に伴う各種の土器技術が伝播した可能性は残されている。

続く2b段階は、全羅南道の栄山江流域の影響を受けていると考える。この地域は5世紀前半にはまだ百済の領域に入っておらず、馬韓あるいは慕韓と呼ばれていた地域ではないかと考えられている[朴淳發2001, 東2001]。現在朝鮮半島では倭の須恵器が、韓国西部の忠清北道から全羅南道にかけて出土する。また最近では南の沿岸地域からも出土する。須恵器はTK208型式以降であるが、多くなるのはTK23型式以降である。特に忠清北道から全羅南道ではほかに倭系遺物も出土するが、百済・栄山江流域から出土する意味は、当時の高句麗に対する倭と百済・栄山江流域の通好が考えられる。また、2b段階の須恵器が百済の領域にはまだ入っていない栄山江流域の土器と関連があることについては、438年、倭の珍が自称した「使持節都督倭百済新羅任那秦韓慕韓六国諸軍事安東將軍倭王」に見られる慕韓（馬韓）が栄山江流域とする考え方もあるが、もしそうだとするならば、倭は、百済とともに慕韓（馬韓）とも通好があったのであろう。そのことは、栄山江流域に見られる倭系の前方後円墳・横穴式石室・埴輪や、倭で出土する半島系の軟質土器・円筒形土器・両耳付壺・鳥足文叩きなどからも、相互の通交が行われ、密接な関係であったことがわかる。栄山江流域に百済の影響が増すことにより、倭と慕韓（馬韓）あるいは百済との相互の関係がどのように変化していったものか、今後の課題としたい。

おわりに

古墳時代中期に伝わった須恵器の生産技術は、ほかの多くの渡来技術と同様、朝鮮半島からの渡来人によって伝えられた。このような技術伝播は倭に大きな影響を与えたが、須恵器一つをとっても当時の朝鮮半島との交流を探る材料になりうる。2b段階の須恵器の伝播した百済・栄山江流域との関係は、土器を通していてもあまりにも複雑で疑問点が多い。今後も土器を通して倭と朝鮮半島三国との交流を探っていきたい。

本稿は白石太一郎先生のご教導に対して何らかの成果を出すべきであるが、在外研究中であり、前稿 [酒井 2001・2002] をもとに改稿したものである。白石先生の学恩に感謝します。

註

(1)——田辺氏が最初に初期須恵器とした定義は高蔵 (TK) 73 型式以降であったが、その後それを遡る須恵器窯跡や須恵器が発見されたことから、最初に伝わった 2a 段階の須恵器を初現期須恵器とする。

(2)——韓国では瓦質土器から陶質土器へ発展した可能性は否定できなく、そのような考え方もあるものの、発展段階が明確な窯が発見されていない。瓦質土器と陶質土器は別の発展をするが、瓦質土器と陶質土器は密接な関係があり、一部瓦質土器から陶質土器に変質するものがあると考えている。この問題については『百済研究』39 輯に掲載予定。

(3)——この蓋杯の口唇部に丸いものがあること、器厚が厚いものがあることなどから、須恵器でなく朝鮮半島の榮山江流域で作られた土器との見解もある。かりに朝鮮半島で作られたとするならば、だれが、どこで製作したのであろうか。当時の百済には丸底にする杯はない。回転ヘラ削りは榮山江流域には後にあるものの、新鳳洞例の須恵器に共通した蓋受けのつくり出しや口唇端面の須恵器特有の窪みの表現も両地域には

見られず、須恵器の模倣とした場合これだけ酷似させるには須恵器細部に熟知し、製作によほど熟練していないとできないと考え、新鳳洞の製品は須恵器であろう。

(4)——公州艇止山遺跡や武寧王陵の陶質土器を須恵器の編年にあてはめる尾野善裕氏の研究がある [尾野 2001]。陶質土器の編年が確立していない段階であるとはいえ、陶質土器を須恵器編年にあてる研究は、陶質土器の前後の変遷が明確でなく、発展段階の違う土器を似ているだけであてはめるのは問題があろう。

(5)——最近、申氏は福泉洞 30・31 号墳を使わず 25・26 号墳を使用する。また、大庭寺窯跡を TK 73 号窯より新しくしていたが前後を逆にして古く改めている。また年代も 5 世紀後半としていたが 440 年代に改めた。さらに金官加耶の支配者集団が移住したとするのを住民の移住としている [申敬澈 2001]。

(6)——[夢村土城発掘調査団 1985]。ソウル大学校博物館のご厚意で実測させていただいた。

(7)——註(5)参照。

引用文献

- 東 潮 2001 「倭と榮山江流域—倭韓の前方後円墳をめぐって—」『朝鮮学報』179
- 植田隆司 1998 「陶邑 (狭山地区)」『古代の土器 5-2 7 世紀の土器 (近畿西部編)』古代土器研究会
- 岡戸哲紀ほか 1995 「陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ」大阪府教育委員会・大阪府埋蔵文化財協会
- 小栗明彦 2000 「金南地方 出土 埴輪의 意義」『百済研究』32 忠南大学校百済研究所
- 尾野善裕 2001 「中・後期古墳時代暦年代再論—いわゆる〈武蔵国造の乱〉をめぐって—」『久保和士君追悼考古論文集』久保和士君追悼記念論文集刊行会
- 亀田修一 1989 「陶製無文当て具小考—播磨出合窯跡出土例の紹介をかねて—」『横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ 生産と流通の考古学』
- 金鍾萬 1999 「馬韓圏域出土両耳付壺小考」『考古学誌』第 10 輯 韓国考古美術研究所
- 金東淑 2002 「新羅・伽耶墳墓の祭儀遺構の遺物に関する研究」『嶺南考古学』30
- 金斗喆 1996 「韓国と日本の馬具」『4・5 世紀の韓日考古学』
- 公州大学校博物館 2000 「龍院里古墳群」
- 酒井清治 2001 「倭における初期須恵器の系譜と渡来人」『第 7 回加耶史国際学術会議 4~5 世紀東アジア社会と加耶』金海市
- 2002 「倭における須恵器生産の開始とその背景」『駒澤大学文学部研究紀要』第 60 号
- 埼玉県教育委員会 1997 「將軍山古墳」
- 申敬澈 1992 「金海 礼安里 160 号墳에 대하여」『伽耶考古学論叢』1
- 2000 「古代의 洛東江, 榮山江, 그리고 倭」『韓国の 前方後円墳』忠南大学校出版部
- 2001b 「五世紀の日本列島と伽耶」『稻荷山古墳の鉄剣を見直す』
- 田中俊明 2003 「高句麗進出以後の金官国」『第 9 回加耶史国際学術会議 加耶と広開土王』金海市

-
- 田辺昭三 1971 「須恵器の誕生」『日本美術工藝』390 日本美術工藝社
—— 1981 『須恵器大成』 角川書店
—— 1982 「初期須恵器について」『考古学論考』 平凡社
忠北大学校博物館 1990 「清州新鳳洞百濟古墳群発掘調査報告書—1990年度調査—」
朝鮮学会 2001 『朝鮮学報』179
虎間英喜 1993 『久米田古墳群発掘調査概要Ⅰ』 岸和田市教育委員会
中村 浩 2001 「和泉窯の展開」『和泉窯陶器の歴史的研究』 芙蓉書房
西口壽生 1999 「飛鳥地域の開発直前の土器」『奈良国立文化財研究所年報1999』
土生田純之 1998 『黄泉国の成立』 学生社
菱田哲郎 1999 『須恵器』
朴淳發 2001 「栄山江流域における前方後円墳の意義」『朝鮮学報』179
三辻利一・虎間英喜 1994 「久米田古墳群出土の須恵器・3」『韓式土器研究』V
光谷拓実・次山淳 1999 「平城宮下層古墳時代の遺物と年輪年代」『奈良国立文化財研究所年報1999』
夢村土城発掘調査団 1985 『夢村土城発掘調査報告書』

(駒澤大学文学部)

(2003年5月7日受理, 2003年7月18日審査終了)

須惠器 생산의 시작

酒井清治

倭에 須惠器가 전해진 것은 언제이고, 어디서로부터인지, 또 그 須惠器가 왜 도입되었는지, 土器 생산을 통해 倭와 韓半島의 교류를 찾아보는 것을 목적으로 했다.

構造窯를 사용한 土器생산이 전해진 것을, 시기 또는 지역을 고려하여 단계를 설정해, 1단계, 2a단계, 2b단계로 했다. 1단계는 百濟지역으로부터 瓦質土器생산기술이, 2a단계는 주로 加耶지역으로부터 陶質土器생산기술이, 2b단계는 주로 百濟·榮山江流域지역으로부터 陶質土器기술이 전해진 것으로 생각했다. 1단계의 出合窯址의 土器는 瓦質로서 그것도 일상什器로서 渡來人을 위해 생산한窯로 생각되고, 후의 陶質土器생산과 목적이 다른 것으로 상정했다. 2a단계의 大庭寺窯址에서는 平底坏가 출토되어, 그 系譜가 문제였다. 그것에 관해서는 百濟·榮山江流域에 분포하는 平底坏의 系譜를 잇는 것으로 생각해, 유공광구소호를 포함해, 2a단계의 加耶系속에도 조금이나마 이미 百濟系·榮山江流域系가 포함되는 것으로 했다. 그것은 加耶系에 없는坏와 유공광구소호를 선택하여 받아들였기 때문으로 했다.

倭의 須惠器 생산도입의 목적은, 2a단계窯의 器種구성을 보면 大甕이 주체로서 그 후에도 오랫동안 만들어지지만, 器臺는 곧 激減하여, 유공광구소호, 이어서坏가 차례로 증가해 간다. 같은 시기의 古墳 器種구성을 보면 大甕을 볼 수 없다. 大甕의 생산목적은 대형창고와 관련하는 저장器種으로서 製作된 것으로 했다. 器臺는 供獻具이지만 금방 激減한다. 그것에 비해 유공광구소호가 받아들여져 빨리 정형화되고, 祭祀具등에 사용되었다. 그러나坏는 供膳具로서의 성격이 강하고, 그 점에서 채용이 늦어져 정형화도 늦어졌다고 생각하고 도입기종의 선택이 있었다고 했다.

須惠器의 생산개시연대에 대해서 陶質土器와의 병행관계와 연대를 알 수 있는 자료, 埼玉古墳群등의 검토로부터 持ノ木古墳의 시기인 5世紀初頭로 했다. 그 이유로서는 韓半島의 高句麗南進에 대해서 倭가 百濟·加耶와 동맹관계에 있었던 것으로 했다.

The Beginning of the Sue Ware Production

SAKAI, Kiyoji

The aim of the research described here is to probe interaction between the Korean Peninsula and Wa through the production of earthenware by examining when and from where Sue ware came to Japan, as well as reasons for its introduction.

Taking into account the periods and regions, I have established three stages for the introduction of earthenware production using structural furnaces: stage 1, stage 2a, and stage 2b. During stage 1 grey-soft earthenware production techniques were introduced from the Paekche region. During stage 2a grey-hard earthenware production techniques were introduced mainly from the Gaya region. During stage 2b grey-hard earthenware production techniques were introduced from the Yeongsan-gang River valley region in Paekche. Earthenware from oven remains from stage 1 are grey-soft utensils, and these ovens are thought to have been made for craftsmen from the continent, and are assumed to have been made for a different purpose than the grey-hard earthenware production that came later. Flat-bottomed cups have been excavated from oven remains found at Ooba-dera from stage 2a, though their origins are not certain. It is thought that these articles can be traced to flat bottomed cups distributed around Paekche and the Yeongsan-gang River valley, and while only a few of these and pitchers have been found among items of the Gaya variety from stage 2a, these were already found among Paekche and Yeongsan-gang River valley articles.

With regard to the purpose of the introduction of Sue ware production, an examination of the types of wares found in ovens from stage 2a reveals that they are mainly large jars, which were made for a long period after this time. There was a sudden decrease in pottery stands, while there was a gradual increase in pitchers followed by cups. Large jars are not to be found among the different varieties of wares found in burial mounds dating from the same time. Thus, the purpose of these large jars was to serve as a type of storage vessel made in association with large storehouses. The pottery stands were made as offerings for tombs, but soon decreased rapidly. In contrast, pitchers were well received and were soon stylized and in the performing of religious rites. However, there are strong suggestions that the cups were used to contain offerings, and this is thought to be the reason why both their adoption and stylization took some time to occur, and why it was one of the types of ware that was chosen

for introduction to Japan.

As for dating the commencement of production of Sue ware, on the basis of an examination of the parallel relationship they had with grey-hard earthenware, materials whose dates have been identified, and sites such as the Saitama burial mounds, I have concluded that they date from the beginning of the 5th century, the period of the Mochinoki burial mound. The reason for their introduction may be attributed to the alliances that Wa had formed with Paekche and Gaya as they held out against the southern advance of Koguryo.